

別海町歴史文化遺産「野付小唄」について

令和7年7月 別海町郷土資料館

1 概要

野付小唄は、1948（昭和23）年に大隅キノが作詞し、1949（昭和24）年に松田喜一が作曲した、野付半島や尾岱沼の情景を歌った別海町を代表するご当地ソングである。また、1969（昭和44）年には、野付小唄に合わせて踊るための振り付けが伊藤栄子によって考案され、地元尾岱沼では、「野付音頭」として野付神社例大祭、盆踊り、小学校の運動会などで踊られていた。現在は、別海村開村八十八周年記念別海音頭保存会が野付小唄の手踊りを復活させ、普及に努めている。

2 野付小唄誕生の経緯

1948（昭和23）年、野付同志会（会長：大隅七郎）は尾岱沼地域の観光用の歌を作るため、歌詞を募集することにした。戸春別に1か所、尾岱沼に3か所の応募箱を置き、広く周知した結果、予想に反して9編もの応募があった。同志会の選考委員による選考審査により、大隅キノが応募した「野付小唄」が採用された。作曲は根室市在住の橋本道博に依頼したが、橋本は恩師である松田喜一を紹介した。1949（昭和24）年、松田の作曲により野付小唄が誕生した。

3 野付小唄の歌詞と作詞者大隅キノ

野付小唄の歌詞は4番まであり、野付半島や尾岱沼の自然、風景、歴史的地名、漁の様子などが見事に詠み込まれている¹⁾。

野付小唄

- 一 野付七里は浮島岬 春は桜のオンニクリオンニクリ
二人連れなら恋問いで 野付よいとこ花曇り
- 二 龍神岬がしぶきで明けりゃ 粋な姿の夫婦松夫婦松
今日も写すか水かがみ 野付よいとこ松の浜
- 三 沖は大漁の舟唄流れ 浮かぶ白帆はうたせ舟うたせ舟
暮れりゃタモカの灯が招く 野付よいとこ舟唄で
- 四 かもめ群れとぶトビカリあたり 乙女心はハマナスにハマナスに
咲いて匂うか二所の島 野付よいとこ花が咲く



大隅キノ

作詞者の大隅キノ（筆名きの・きの女）は、1900（明治33年）石川県に生まれ、別海村春別で育ち、1925（大正14）年に尾岱沼に移った。幼少のころから祖母に古歌を習い親しみ、春別で送った多感な少女時代には心の様を詩に託し歌日記として書き続けた。子育てや店の商いと忙

1) ここに掲載した歌詞は、大隅きの女（1981）、84-85頁に掲載されたものを採用した。別海村・別海村観光協会が作成したソノシートのジャケット（巻末資料参照）に印刷された歌詞とは使われている漢字などが一部異なり、特に二番の「粋な姿の夫婦松」は、ソノシート掲載の歌詞では「仇な姿の夫婦松」となっている。ただし、実際にソノシートで歌われているのは「粋な姿の夫婦松」である。元々は「粋な（いきな）」ではなく「仇な（あだな・婀娜な）」であったのが、レコーディングの際に改変された可能性も残されている。

しい中、独学で作歌を続け、北海タイムスや婦人倶楽部の歌壇に投稿した²⁾。1927（昭和2）年5月、婦人倶楽部が募集した桐というテーマに応募した「桐の花夕焼雲の映ゆる頃母の面影浮び出づるも」が、当時主婦の友社の短歌部の選者である九条武子の選に入る栄誉を受けた³⁾。

1947（昭和22）年10月、大隅キノ、戸田一郎、大隅七郎など会員16人で、短歌・俳句の会である「白鳥会」を尾岱沼で創立する。夫の定年退職により昭和34年に中標津に転居した後は、自ら新しい短歌の会「たわらまっぷ」を結成し、それ以降3冊の歌集を出版している。この功績が評価され、1979（昭和54）年1月に中標津町の教育文化貢献賞を受賞、また昭和58年度の根室管内教育実践表彰を受けている。

1981（昭和56）年10月21日、大隅キノの子どもたちが中心となり、尾岱沼3番地56の私有地に野付小唄の歌碑を建立している⁴⁾。この歌碑は高さ1.2m、幅2.4mの日高石できており、3番の歌詞が彫り込まれている。

この歌碑について、キノの娘である大隅律子は次のような短歌を詠んでいる。

「わが山に母の歌碑建てはらからの貧しき思惟はこの山に捨つ」⁵⁾



野付小唄歌碑

4 野付小唄の作曲者松田喜一

野付小唄の作曲者松田喜一（1901年～1963年）は、1901（明治34）年函館の生まれで、函館師範学校を卒業後、1928（昭和3）年野付牛（現北見市）高等女学校の音楽教師となった。この時に作曲した「野付牛小唄」は東海林太郎が歌って大好評であった。また「進め北海道」は、全道各地の運動会や学芸会で歌われ、作曲者松田喜一を一躍有名にした曲であった。その後茂尻尋常高等小学校（現赤平市）、留萌高等女学校に転任し、各地の校歌などを作曲している。

1949（昭和24）年に網走女子高等学校に転任し、この時代に野付小唄の作曲を行っている。その後結核で長い入院生活を送るが、その間にも作曲活動を続け、その数は200曲に達した。別海町歴史文化遺産「別海音頭」の作曲者でもある。



野付小唄のソノシート
（別海町郷土資料館蔵）

5 野付小唄の振り付けとレコード化

1969（昭和44）年、野付漁業協同組合の大橋徳雄参事は別海村役場観光係の森下幸一郎に野付小唄の振り付けができないだろうかと相談した。森下は西別市街（現別海市街）の伊藤栄子（芸名：花柳寿美栄）に依頼をし、振り付けが完成した。

2) 矢吹弘照（1988）

3) 矢吹弘照（1988）。キノの長男七郎は、「この入選を父と共に喜んだ当時の母の喜び、そしてうれしそうな顔が当時まだ10歳であったが、幼い胸に鮮烈に刻みこまれた」と回想している。大隅七郎（1977）、18頁。

4) 石碑の建立はキノの義理の孫の発案であった。「彼の計画には、この樹の根方におばあちゃんの（私）歌碑を建てる目的だそうです。今私の息子や娘に呼びかけています。いつの事やら判らないが、出来そうな雰囲気です。」大隅きの女（1981）、83-84頁。

5) 『新墾：短歌雑誌』52(2)(559), (1982年)、37頁。

同じころ、森下は知り合いを通じて野付小唄のレコード化を北海道放送株式会社（HBC）に依頼した。歌は西君江と永森光隆、演奏はHBCリズムスターズ、キングレコードの製作によりレコーディングが行われ、野付湾に浮かぶ打瀬船の写真を印刷したピクチャーソノシートが完成した。ジャケット表にも打瀬船の写真が使われ、ジャケット裏には野付小唄の歌詞と楽譜が掲載されている（巻末資料参照）。見開きジャケットを開くと、野付小唄の振り付けが写真と伊藤栄子の解説付きで載っている。また、野付小唄の後にはナレー



1973年の運動会で野付音頭を踊る野付小学校児童
（野付小学校蔵）

タ中村静代による野付風蓮道立自然公園の案内が収録されている。別海村と別海村観光協会が作成したこのソノシートは、尾岱沼栈橋などで多くの観光客に配られた。

尾岱沼では野付児童館で伊藤栄子や広木（藤）久美子らが師匠となって学校の先生や子供たちに日本舞踊を教えていたが、野付小唄の手踊りも踊りやすいように振り付けを易しくして教えていた。それ以降、1973（昭和48）年頃から野付小学校の運動会では「野付音頭」として子どもたちが輪になって踊りを披露した⁶⁾。また、野付神社例大祭、盆踊りでも踊られていた。

キノの娘大隅律子は、運動会で野付小学校児童が踊る野付音頭について次のような短歌を詠んでいる。

「運動会に孫等の踊る野付音頭若き母の詩しみじみと聞く」⁷⁾

「運動会のシーズンなるか聞える母思い出す野付音頭が」⁸⁾

6 野付小唄のその後

野付小学校運動会では、1989（平成元）年頃から野付音頭はプログラムから外されてしまい⁹⁾、地元尾岱沼の盆踊りでも踊られなくなった。現在では尾岱沼の防災無線で野付音頭のメロディーが試験放送として毎日午後3時に流れるほか、野付湾内を巡る観光船内でもレコード音源が流されているものの、地元尾岱沼では野付小唄の手踊りが踊られなくなって久しい。

別海村開村八十八周年記念別海音頭保存会は、野付小唄の手踊りを後世に伝えていくため、2020（令和2）年より藤久美子や尾岱沼出身者の記憶を頼りに踊り方を習っていた。野付小唄の手踊りについて別海町の



別海音頭保存会による野付小唄手踊りの披露
（2023年10月8日奥行白散策デー時）

6) 野付小学校に保存されている昭和48年度の卒業アルバムには、野付音頭を踊る児童の写真が含まれており、「「盆踊り」じゃないわよ。有名な野付小唄よ。」とのキャプションが付けられている。昭和47年度のアルバムには野付音頭の様子がなく、野付小学校の運動会で野付音頭が踊られ始めたのは1973年からと推定される。

7) 『新墾：短歌雑誌』60(10)(663)（1990年）、31頁。

8) 『新墾：短歌雑誌』62(9)(688)（1992年）、40頁。

9) 野付小学校に保存されている卒業アルバムでは、児童が野付音頭を踊っている写真が掲載されているのは1988年までであり、それ以降は掲載がない。ただし、1989年のアルバムは野付小学校に保存されていない。

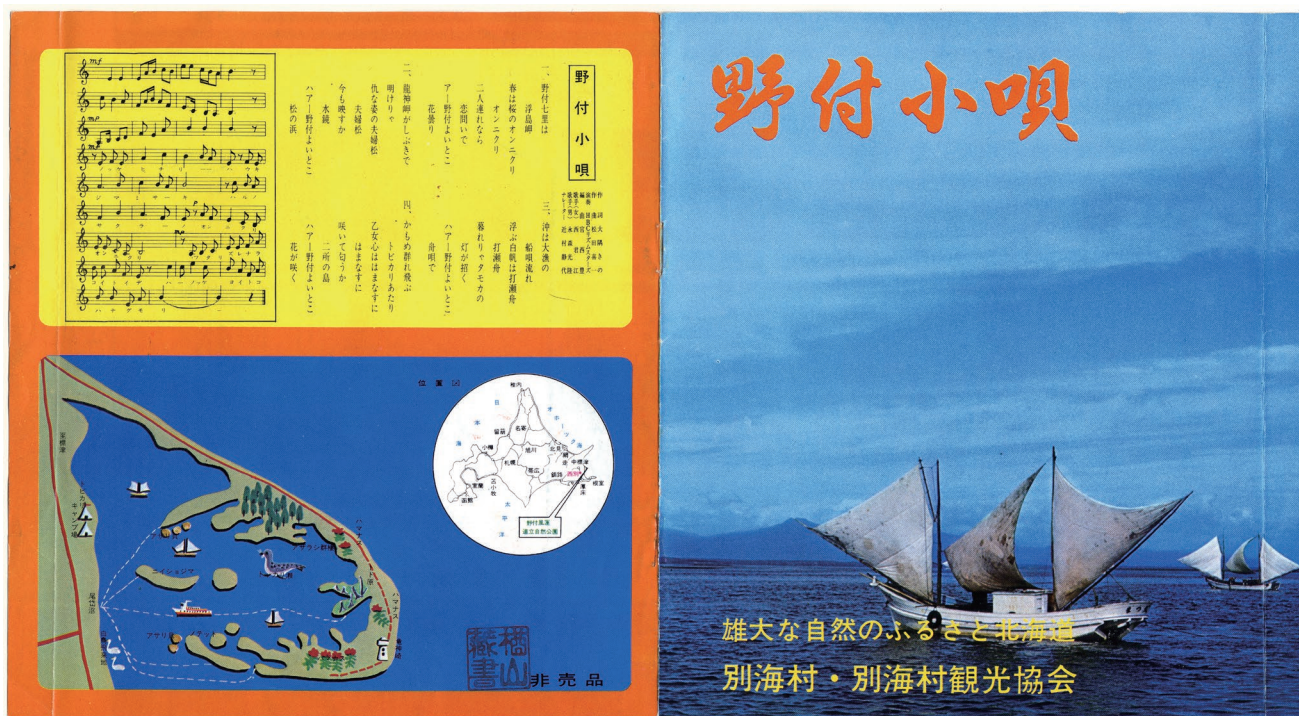
広報誌を通じて情報提供を呼び掛けたところ、野付小唄ソノシートジャケット裏に掲載されている、手踊りの振り付け解説図（巻末資料参照）の提供があった。これにより野付小唄の手踊りをオリジナルどおりに復活させることができた。2023（令和5）年からは、奥行臼散策デーや別海神社例大祭などの各種イベント時に披露し、野付小唄の保存と普及に努めている。

野付小唄の碑の台座には、次の言葉が刻まれている。

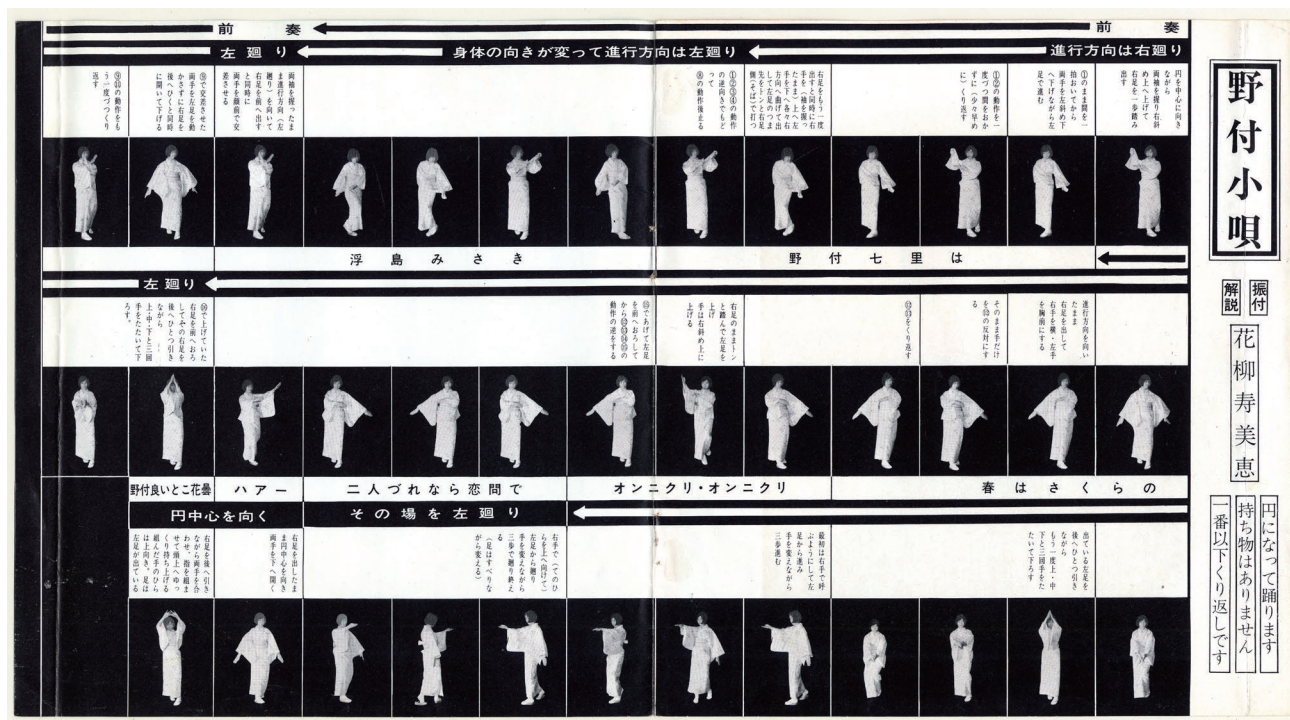
「この唄が今後も多くの人に愛唱されることを願うものである。」

参考文献

- ・尾岱沼開基百年記念行事实行委員会記念誌編集委員会編『尾岱沼開基百年記念誌—尾岱沼』（1988年）、172-174頁。
- ・大隅きの女『歌集 歳月』（1971年）
- ・大隅きの『歌集 俵真布川』（1973年）（大隅キノ写真出典）
- ・大隅きの『歌集山荘日記』（1988年）
- ・大隅きの女「嘘と実」『北のふるさと』No.6、1981年、81-85頁。
- ・大隅七郎「回想」『文芸別海』第5号（1977年）、79-82頁。
- ・大堀清勝「野付小唄物語」（私家版、2025年）。別海町文化財保護審議会委員である大堀清勝氏は、野付小唄について精力的に調査し、その成果を同著作にまとめている。本稿は多くの部分を大堀氏の同著作に依っている。
- ・根室市音楽協会『ねむろの唄—唄でつづる根室の歴史—』（1980年）、131-132、134-136頁。
- ・矢吹弘照「序」大隅きの『歌集山荘日記』（1988年）
- ・『新墾：短歌雑誌』52(2)(559)、(1982年)、37頁。（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/7917000>）
- ・『新墾：短歌雑誌』60(10)(663)(1990年)、31頁。（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/7917104>）
- ・『新墾：短歌雑誌』62(9)(688)(1992年)、40頁。（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/7917127>）
- ・大隅美保子氏からの聞き取り（2025年4月14日）



野付小唄ソノシートのジャケット表
(別海町郷土資料館蔵 檀山満夫氏寄贈)



野付小唄ソノシートのジャケット裏
(別海町郷土資料館蔵 檀山満夫氏寄贈)